

アレルギー抑えるたんぱく質

筑波大チームが発見

花粉症やアトピー性皮膚炎といったアレルギーの発症を強く抑える働きがある細胞表面のたんぱく質（受容体）を、筑波大の研究チームが発見した。マウスの実験で、この受容体を刺激するとアレルギーを引き起こす物質が細胞の外に出なくなり、アレルギー反応を抑えることができた。ヒトも同様の受容体があり、アレルギー疾患の根本的な治療法の開発につながる可能性がある。6日付の米科学誌「ネイチャー・イムノロジー」（電子版）に発表した。

タニや花粉などアレルギーの原因物質（抗原）は、体内で抗体（IgE 抗体）と結合し、全身の肥満細胞の表面にくっつく。このときに肥満細胞を活性化する物質（シグナル）が出ることで、細胞の外にヒスタミ

花粉症・アトピー…

治療法開発に期待

ンなどの化学物質が放出され、アレルギー症状が起きる。このアレルギー疾患にも共通のメカニズムだ。

筑波大大学院の渋谷彰教授と田原聡子助教らは、肥満細胞の表面で、肥満細胞を活性化するシグナルの伝達を阻止する新しい受容体を発見し、アラジン1と名付けた。アラジン1をうまく働かせると、ヒスタミンなどの化学物質の放出が半減した。

またアラジン1を働かなくしたマウスは、普通のマウスよりも強く激しいアレルギー症状が出た。アラジン1がアレルギー反応を抑える働きがあることが確認できた。

渋谷教授は「アラジン1はアレルギー反応を起こす最初のシグナルの伝達を妨げる。すべてのアレルギー疾患の発症を阻止できる根本的な治療法の開発が期待できる」と話す。

（中村浩彦）